週刊ポスト 2018・2・26（A）発売号

名曲カルテ

昭和歌謡といつまでも

堀井六郎
絵・松本 浦

第25回 西條八十の人生を変えた関東大震災の日の出逢い

「人生は出逢いである」という言葉があるように、人はある出逢いによって、その後の運命が劇的に変わってしまうことがあります。まあ、それを含めた運命が宿命というものなのかもしれませんが。

コロムビアレコードの重鎮、古賀政男に請われて浪曲界から歌謡界へと転進した村田英雄は、古賀が提供する作品では期待ほどのヒットを生み出せず、西條八十に三顧の礼を尽くして依頼した『王将』の歌詞の作曲を古賀ではなく若手の船村徹に要請。この出逢いが戦後最大とも言われる大ヒットを生み、それ以前に発売された古賀作品『無法松の一生』などが再評価され、歌手として大成します。

テイチクレコードに所属していた三波春夫は、当時の常識ではコロムビア専属の古賀政男の作品を歌うことなど考えられなかったのが、東京五輪という国民的行事関連ということで開放された古賀作曲の『東京五輪音頭』を歌ったことで、国民的歌手への道が開かれます。出逢いの妙、ご縁の不思議ですね。

今から95年ほど前、大正12年に起こった関東大震災は、ひとりの仏文学者の運命を変えました。当時、早稲田大学で若くして教鞭を執り、アルチュール・ランボーの研究でも知られていた西條八十は、北原白秋、三木露風に続く純粋詩人でもありました。

現在では、戦前の『旅の夜風』『蘇州夜曲』から戦後の『青い山脈』『王将』『絶唱』に至るまで、昭和の歌謡界に君臨した大作詞家として名高い西條ですが、31歳のときに関東大震災に遭遇するまで歌謡界とは無縁でした。

震災当日、妻子の無事を確認した西條は、余震の続く中、親類の安否を確かめに北新宿の自宅から月島方面に向かいますが、逃げ惑う人波に飲まれ、いつしか上野公園にたどりつきます。すでに陽は落ち避難してきた人でいっぱいの上野の山から見えるのは猛火の海だったそうです。

深夜になり、悲痛さが蔓延している中で一人の少年がハーモニカを取り出し、誰もが知るメロディーを奏でると、人々は怒り出すどころか、その音に聴き入りました。『船頭小唄』（曲・中山晋平）のメロディーだったとの説もありますが、西條は明記していません。

それまで俗曲として蔑んでいた歌謡曲の作詞という仕事に詩人・西條が大きな価値を認めた瞬間でした。多くの人のために真剣に大衆歌謡を書いてみようと決心した西條は、やがて『東京行進曲』（同名映画の主題歌、曲・中山晋平）を作詞、大震災から6年半後の昭和5年に行なわれた帝都復興祭をこの曲で盛り上げ、さらに昭和8年には『東京音頭』（曲・中山晋平）で震災の夜に願った「東京の人をにぎやかに踊らせてみたい」という夢を実現させました。

平成23年3月11日、東北地方を中心に甚大な被害をもたらした東日本大震災から、まもなく7年が経とうとしています。

ほりい・ろくろう　昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。著書に『私的「昭和大衆歌謡考」』第1～3集（グスコー出版）がある